

令和２年度小松市立国府小学校 学校評価2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導①	〈児童会活動を活発化させ、助け合い、認め合う力を育む〉	【たてわり活動】 たてわりでの意識はまだまだうすいが高学年を中心に取り組むことができている。たてわり活動に向けては、各学年活動目標を立て、活動することができた。１学期に一回常タイム以外での休み時間を使ったたてわり活動を行うことができ、２学期以降のたてわり活動の足掛かりとなった。	【たてわり活動】 たてわり遊び、あいさつリレー、集会など、年間を通して様々な活動を行うことができた。今年度はたてわり遊びを新しく取り入れ、楽しく異学年交流できる場を作ることができた。活動を通して、６年生は主体的な活動を計画し実施する経験を積むことができた。また、４・５年生も上級生としての意識が芽生え、低学年をサポートしたり、６年生を支えることができた。来年度は、内容を精選し、国府っ子タイムと連携して、楽しく主体的に異学年で交流することに重点を置いていく。
	【たてわり活動】 ・６年生主体に行い、異学年交流において、助け合いや認め合いの場を設ける。 たてわり活動における各学年の目標を立てる。 ・常タイムでのたてわり活動だけでなく、休み時間のたてわりでの交流も意図的に取り組むようにする。 【あいさつ】 ・「やかたのあいさつ」を目標に掲げ、挨拶を通して思いやりの心を育む。 ・学期始めには、あたたかい挨拶があふれる学校をつくるために挨拶運動を全校対象に実施する。 ・児童が挨拶の活動を広げられるように、代表議会と学級会をつなげる。 【やかた集会】 ・児童同士でたてわり活動やあいさつ運動の取り組みでの良い点を認め合ったり、伝えたりして、よりよい実践につなげる。	【あいさつ】 児童会の劇によって、やかたのあいさつを全校に発信し、高学年を中心にあいさつ運動に取り組むことができた。コロナによる人数制限でークラスずつしか挨拶ができていないが、２学期以降たてわりリレーでたてわりでのあいさつ運動を展開していく。代表議会で学級委員によって、各クラスのあいさつ運動の取り組みや振り返りを行い、学級会と代表議会をつなげることができている。 【やかた集会】 コロナによる人数制限でたてわりの１組と２組で分けて、実施することができた。学校全体で認め合う場を設けることができた。	【あいさつ】 今年度は、自然なあいさつができるようになるための「あいさつ運動」と目的が明確化された。様々なあいさつ運動が主体的に児童会から企画され、特にエアーハイタッチがお互いに気持ちよくあいさつをするためには有効だった。来年度も自然なあいさつができるように継続しつなげていきたい。 【やかた集会】 今年度も認め合う場として、くり返し取り組むことができた。たてわり活動とやかた集会の違いが曖昧になっている部分もあるので、来年度以降は活動を精選し、やかた集会から人権集会は切り離し、学期に１回程度とする。
生徒指導②	〈学年・学級活動を活発化させ、助け合い課題を解決する力を育む〉	・学期始めの４月、休校明けの６月に２回実施することができ、落ち着いた安心して学習できる学習環境を整えることができた。「学習の４つのきまり」に取り組んでいる期間は意識高く取り組めているが、少しずつ意識は下がっていくので、継続した声かけが必要である。 ・３年生以上は実行委員会を開き、各学年主体的に学年行事を企画運営することができている。 ・学級会では、学級目標やクラスの諸課題について、やかたシートを使って、対話しながらクラスの課題解決へ向けて取り組むことができている。	・「学習の４つのきまり」の取り組みは、年間を通して３回取り組むことで、学習規律を徹底させ、落ち着いた学習できる環境を整えることができた。意識は日々薄れていくので、学期始めに取り組むことは有効であり、来年度以降も継続して、取り組んでいきたい。 ・３年生以上に関しては、主体的に活動を行うことのひとつとして、学年に合わせて実行委員会を開き、児童が自分たちで考えて学年行事を運営することができた。 ・やかたシートは、クラス目標やめざす授業、学校行事や人権集会など様々な場面で活用することができ、目標をもって活動に取り組むには有効であったが、学級にやかたシートが乱立し、混乱することもあったので、来年度は使い方を検討したい。
	・竹馬、鉄棒、なわとび、タイヤとびのできてほしい技をレベル別に表記し、「名人」を目指す「チャレンジカード」に全校で取り組み、いろいろな運動に親しめるようにする。 ・握力と投力をつける「にぎなげチャレンジ」を導入し、低学年から正しく「にぎる・なげる」力を身につける。 ・取り組み者数100％、名人達成者数120人を目標にする。	・コロナウイルス感染対策のため、「チャレンジカード」を実施できていない。その代わり、体育委員会で「密を避けながらできる遊び」を考え、掲示することで運動への関心を高めようとしている。 ・４～６年生で学校独自のスポーツテストを行い、経年比較をする予定である。結果から児童の強みと弱みを分析し、今後の指導に生かせるようにしていきたい。 ・１０月に行われるスポーツフェスティバルを通して、運動の機会を増やせるようにする。	・コロナウイルス感染対策のため、「チャレンジカード」は実施できなかった。しかし、スポチャレいしかわと連動した「スポチャレ大会」やペア学年で行う「なわとび大会」といったスポーツの大会を開催することで運動する機会を確保した。 ・スポーツ庁の委託事業である「授業充実・体力向上アクションプラン」を学校として行い、授業の視点からも運動への意欲や機会を見直すきっかけとした。１・４・５・６年生の約８割の児童が運動が楽しいと回答しており、コロナ禍の中でも児童の意欲を維持することができたと感じている。 ・来年度は「自分の身体について知る」ということを保健教育と連動して取り入れられるようにしていきたい。
保健健康教育①	〈自分の身体や運動に関心を持てる取り組みを図る〉	・「正しい手の洗い方」「こまめな手洗い」について、放送での集会や掲示などを通して指導し、毎日、手洗いの音楽を流して動きかけていった。 ・週初めに各クラスの清潔チェックを利用して、朝の手洗いやマスクの着用などの感染症対策についても確認することにより、手洗いを含めた新しい生活様式のさらなる定着を図りたい。 ・今後も保健指導や委員会活動などを通して、正しい情報を伝え、くり返し感染症対策を指導し、定着をはかる。 ・今後は、育友会保健委員会、教養委員会がネットについてのアンケート調査を行い、生活習慣への影響などを検討し、生活改善についても働きかけていく。	・新しい生活様式が身につく中でも朝の検温やこまめな手洗い、ハンカチ持参、マスク着用等、なかなか定着できない児童もいるので、今後も集団はもちろん個別での働きかけも継続していく。 ・コロナ対策を継続してきたので、今年度はインフル罹患者がゼロ、欠席者や保健室来室者が非常に少なかった。しかし、ストレスや生活リズムの乱れにより体調不良を訴える児童や登校渋りの児童等が見られた。今後も学校全体で心と体の健康について考えていく。 ・１月の保健指導では対策の確認だけでなく、差別のことや頑張っている人たちがいること等を伝えることができた。 ・ネット利用のアンケート結果やルール作りの資料等の情報を保護者に提供した。今年度は育友会との連携が十分にできなかったので、来年度、どのように連携していくかが課題である。
	・「正しい手の洗い方」を知り、放送で音楽を流したり、保健委員会で呼びかけたりして、手洗いの定着を図る。 ・毎週の清潔チェックを学級担任と連携して行い、清潔習慣の定着を図る。 ・保健だよりや掲示、各クラスへの保健指導等を通して、感染症予防や生活習慣に関する指導を行う。	・新型コロナウイルス感染防止の休校による児童の心身の健康を把握するためにアンケートを行い、気にかかる児童にきめ細かくサポートを行った。（支援委員会、児童面談、職員間での共有、保護者との懇談、外部機関・医療との連携等、校内での組織的な対応） ・気づき表の記入をもとに、支援を必要とする児童についての支援委員会から専門相談機関につなげ、支援策を講じている。今後、立てた手立てが有効であるかを考えながら、その後の支援に生かしていく。	・学校生活において、学習の困難さを抱える児童、行動・対人関係で困り感を抱える児童、不登校傾向の児童など、気にかかる児童の様子について把握し、早い対応を行ってきた。 ・職員、家庭、支援員、ＳＣ、心の相談員、スクールサポート、専門相談、市教研等、医療機関等と連携して対応を行ってきた。 ・児童が元気に生活するために何が必要かについて、職員で協議し、日々の生活や行事の取り組みに生かしてきた。コロナ感染予防の生活が続き、心に不安を抱える児童が多くなる中でも、学校全体として元気に学校生活を送ることができていると感じる。 ・今後支援を必要とする児童に対して、見通しを持ち継続的に支援していくために、気づき表を有効に活用していくことが課題である。
特別支援教育	〈望ましい生活習慣の定着に向けた指導の充実を図る〉	・「正しい手の洗い方」「こまめな手洗い」について、放送での集会や掲示などを通して指導し、毎日、手洗いの音楽を流して動きかけていった。 ・週初めに各クラスの清潔チェックを利用して、朝の手洗いやマスクの着用などの感染症対策についても確認することにより、手洗いを含めた新しい生活様式のさらなる定着を図りたい。 ・今後も保健指導や委員会活動などを通して、正しい情報を伝え、くり返し感染症対策を指導し、定着をはかる。 ・今後は、育友会保健委員会、教養委員会がネットについてのアンケート調査を行い、生活習慣への影響などを検討し、生活改善についても働きかけていく。	・新しい生活様式が身につく中でも朝の検温やこまめな手洗い、ハンカチ持参、マスク着用等、なかなか定着できない児童もいるので、今後も集団はもちろん個別での働きかけも継続していく。 ・コロナ対策を継続してきたので、今年度はインフル罹患者がゼロ、欠席者や保健室来室者が非常に少なかった。しかし、ストレスや生活リズムの乱れにより体調不良を訴える児童や登校渋りの児童等が見られた。今後も学校全体で心と体の健康について考えていく。 ・１月の保健指導では対策の確認だけでなく、差別のことや頑張っている人たちがいること等を伝えることができた。 ・ネット利用のアンケート結果やルール作りの資料等の情報を保護者に提供した。今年度は育友会との連携が十分にできなかったので、来年度、どのように連携していくかが課題である。
	・校内委員会を中心とした組織的な支援体制をつくる。 ・支援の結果を常に見とりその後に生かす。	・新型コロナウイルス感染防止の休校による児童の心身の健康を把握するためにアンケートを行い、気にかかる児童にきめ細かくサポートを行った。（支援委員会、児童面談、職員間での共有、保護者との懇談、外部機関・医療との連携等、校内での組織的な対応） ・気づき表の記入をもとに、支援を必要とする児童についての支援委員会から専門相談機関につなげ、支援策を講じている。今後、立てた手立てが有効であるかを考えながら、その後の支援に生かしていく。	・学校生活において、学習の困難さを抱える児童、行動・対人関係で困り感を抱える児童、不登校傾向の児童など、気にかかる児童の様子について把握し、早い対応を行ってきた。 ・職員、家庭、支援員、ＳＣ、心の相談員、スクールサポート、専門相談、市教研等、医療機関等と連携して対応を行ってきた。 ・児童が元気に生活するために何が必要かについて、職員で協議し、日々の生活や行事の取り組みに生かしてきた。コロナ感染予防の生活が続き、心に不安を抱える児童が多くなる中でも、学校全体として元気に学校生活を送ることができていると感じる。 ・今後支援を必要とする児童に対して、見通しを持ち継続的に支援していくために、気づき表を有効に活用していくことが課題である。
道徳教育	〈考え、議論する道徳授業を推進する〉	・夏季休業中に校内研修会を行えなかった。２学期中に研修会をもち、動画の視聴をして、授業づくりについて学習する。その後、共通空き時間等を利用して授業の様子を交流する。 ・１学期に授業参観・学校公開は行われなかったため、保護者や地域に向けた道徳の授業公開もまだ行われていない。今後行われる授業参観や学校公開で道徳の授業を公開するよう、呼びかける。また、１１月学校公開での「道徳ファミリートーク」は計画通り行う予定である。	・１０月に動画視聴と教材研究の研修会を行った。学校公開を中心とした「道徳ファミリートーク」の教材について学年で話し合うことができた。授業交流が難しいが、週予定に入れるなどして、確実に行えるようにしたい。 ・１１月学校公開で「道徳ファミリートーク」は計画通り実施できた。新型コロナウイルス感染症対策もあり、保護者や地域に向けた道徳の授業公開はすべての学級で行われたわけではなかった。
	・夏季休業中に校内研修会を行い、授業づくりについて学習する。２学期に共通空き時間を利用して授業の様子を交流する。 ・年一回以上、授業参観や学校公開で道徳の授業を公開する。また、１１月学校公開に「道徳ファミリートーク」を行い、家庭との連携を図る。	・新型コロナウイルスの感染予防のため、学校図書館の貸出・返却方法等の新しい利用の仕方の運用があり、貸出冊数が伸びなかった。学級担任が、読書の時間を確保し、貸出冊数データを利用し、児童に働きかけていく。 ・「読む４」の取組は、２学期から図書委員会とも連携し、読了状況をこまめに確認していく。 ・質的な向上を図るため、図書委員会が「本の分類」についての紹介をビデオ放送で行う。	・読書オリンピックと多読賞の取組により、読書量の確保が図られた。図書委員会による読書週間での読書ビンゴや本の分類おみくじなどの取組により、読書への意欲が高まった。 ・貸出冊数データを利用し、学級担任が全体や個別に読書指導を行ったことで、ほとんどの児童が月に３冊以上本を借りるようになった。 ・「読む４」達成者は、２学期末時点で256人（86％）であった。図書担当が学級担任に働きかけ、学級担任が呼びかけることで、意欲を喚起した。図書委員会や図書館司書とも連携し、呼びかけや読了状況のこまめな確認を行った。 ・質的な向上を図る目的で、図書委員会が「本の分類」についての紹介をビデオ放送で行った。さらに、読書週間でのビブリオバトルでいろいろな本を紹介することにより、読書の幅を広げることができた。
読書教育	〈読書量を確保し、読書の質的な向上を図る〉	・新型コロナウイルスの感染予防のため、学校図書館の貸出・返却方法等の新しい利用の仕方の運用があり、貸出冊数が伸びなかった。学級担任が、読書の時間を確保し、貸出冊数データを利用し、児童に働きかけていく。 ・「読む４」の取組は、２学期から図書委員会とも連携し、読了状況をこまめに確認していく。 ・質的な向上を図るため、図書委員会が「本の分類」についての紹介をビデオ放送で行う。	・読書オリンピックと多読賞の取組により、読書量の確保が図られた。図書委員会による読書週間での読書ビンゴや本の分類おみくじなどの取組により、読書への意欲が高まった。 ・貸出冊数データを利用し、学級担任が全体や個別に読書指導を行ったことで、ほとんどの児童が月に３冊以上本を借りるようになった。 ・「読む４」達成者は、２学期末時点で256人（86％）であった。図書担当が学級担任に働きかけ、学級担任が呼びかけることで、意欲を喚起した。図書委員会や図書館司書とも連携し、呼びかけや読了状況のこまめな確認を行った。 ・質的な向上を図る目的で、図書委員会が「本の分類」についての紹介をビデオ放送で行った。さらに、読書週間でのビブリオバトルでいろいろな本を紹介することにより、読書の幅を広げることができた。
	・読書オリンピックと多読賞を設け、読書に対する意欲を喚起することで読書習慣を育てる。 ・月１回の貸出冊数データを利用し、学級担任が月１回読書指導を行い、全員月に３冊以上本を借りるようにする。 ・「本のとびら」から選定した、各学年の課題図書４冊を１年間で読了する「読む４」の取組を行い、各学期末毎に学級担任と図書担当が読了状況を確認する。 ・図書担当が働きかけ、図書館司書と連携を図ったり図書委員会が呼びかけたりする取組を通し、質的な向上を図る。	・感染症の影響でクラブなどが中止となり、地域との連携は難しい状況にある。しかし、少人数での地域講師招聘など現状でできることを探りながら行っている。感染の様子を見て、教育活動に再度位置付けていきたい。 ・家庭学習は「プラス週間」として行った。少しずつ取り掛かる時間を守りながら学習できるようになってきた。自分の力でよりよい家庭学習を行っていく力をつけさせる。	・コロナに関する差別についての学習をし、家庭でも話し合う機会（ファミリートーク）をもった。親子で話し合い、充実した時間を持てたことが、多くの感想から感じられた。 ・育友会の学校保健委員会は感染症対策で開催できなかったが、児童や家庭へのアンケートをもとに、ネットの利用に関しての文書提案、注意喚起を行うことができた。
家庭・連携・地域との	家庭・地域の力を生かした教育活動の推進	・感染症の影響でクラブなどが中止となり、地域との連携は難しい状況にある。しかし、少人数での地域講師招聘など現状でできることを探りながら行っている。感染の様子を見て、教育活動に再度位置付けていきたい。 ・家庭学習は「プラス週間」として行った。少しずつ取り掛かる時間を守りながら学習できるようになってきた。自分の力でよりよい家庭学習を行っていく力をつけさせる。	・コロナに関する差別についての学習をし、家庭でも話し合う機会（ファミリートーク）をもった。親子で話し合い、充実した時間を持てたことが、多くの感想から感じられた。 ・育友会の学校保健委員会は感染症対策で開催できなかったが、児童や家庭へのアンケートをもとに、ネットの利用に関しての文書提案、注意喚起を行うことができた。
	家庭や地域の力を生かした活動を、教育課程に位置付ける。 ・クラブや総合的な学習などで人材を活用する。 ・家庭との双方向の取組を行う。	・感染症の影響でクラブなどが中止となり、地域との連携は難しい状況にある。しかし、少人数での地域講師招聘など現状でできることを探りながら行っている。感染の様子を見て、教育活動に再度位置付けていきたい。 ・家庭学習は「プラス週間」として行った。少しずつ取り掛かる時間を守りながら学習できるようになってきた。自分の力でよりよい家庭学習を行っていく力をつけさせる。	・コロナに関する差別についての学習をし、家庭でも話し合う機会（ファミリートーク）をもった。親子で話し合い、充実した時間を持てたことが、多くの感想から感じられた。 ・育友会の学校保健委員会は感染症対策で開催できなかったが、児童や家庭へのアンケートをもとに、ネットの利用に関しての文書提案、注意喚起を行うことができた。

学校関係者評価	＜８月＞ ・コロナで学校は大変だと思うが、家族の立場からはとても感謝している。休校中は、子どもは時間を持て余し元気がない様子だったが、学校が再開してからは、学校生活をとても楽しんでいる様子が伝わってくる。学校の中だけでなく、登下校もとても楽しいようで、友だちと触れ合うことのよさを感じているようだ。地域住民も地域で子どもがいきいきと過ごしているのをうれしく感じている。 ・コロナの休校で外出や友達と遊ぶ事ができず、ゲームを多くするようになり、目が悪くなってしまった。ゲームはとても魅力的で友だちとのコミュニケーションにもなっている。一旦与えてしまうと子どもからゲームを切り離すのは、とても難しいように感じる。適切な付き合い方を家庭内で考えていけるとよい。 ・親は子どもへの期待が大きく、わが子の良さを認められないのではないかと。親に子どもの頑張りを伝えられる機会が必要。 ・家庭学習カードは、子どもが意識的に自分の家庭学習を見直す機会になっているのではないかと。とてもよい方法なので、これからも続けていけるとよい。 ・コロナ禍の中、工夫をしながら活動をしていることに感謝しているが、子ども達はそのような中でも達成感をもって学校生活を送っているようである。感染防止に気をつけながら、様々な活動を行ってきた学校に感謝している。子どもの様子を見ると、ふれあいながら生き生きと活動している子ども達の姿を見るとこちらもうれしい気持ちになる。これからの子ども達の成長が楽しみである。 ＜２月＞ ・GIGAスクール構想で配布されたタブレットは、どのように利用していくのか。学校での利用が、家庭でのPCやタブレットの利用の意欲を高めているようである。その反面、セキュリティの面で心配がある。授業での利用と共に、情報の扱い方についての指導もお願いしたい。併せて、家庭ではどのような注意が必要なのか知らせる必要がある。 ・子ども達のネット事情は心配である。中学校とも連携しながら、取り組んでいけるとよい。 ・大人は、コロナによる学校生活への影響を心配しているが、子ども達はそのような中でも達成感をもって学校生活を送っているようである。感染防止に気をつけながら、様々な活動を行ってきた学校に感謝している。子どもの様子を見ると、ふれあいながら生き生きと活動している子ども達の姿を見るとこちらもうれしい気持ちになる。これからの子ども達の成長が楽しみである。
---------	---